



日本イスパニヤ学会

Asociación Japonesa de Hispanistas

会報第 18 号 / Boletín Núm.18

2011 年 9 月 3 日 / 3 de septiembre de 2011

事務局

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10

ア-バン大塚 3F (株) ガリレオ

学会業務情報化センター 東京オフィス内

Tel:03-5907-3750 Fax:03-5907-6364

e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp

ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/>

広報委員会編集部

〒466-8673 名古屋市昭和区山里町 18

南山大学外国語学部

スペイン・ラテンアメリカ学科

佐竹謙一研究室 Tel:052-832-3111(代表)

e-mail: satakekn@nanzan-u.ac.jp

目次

巻頭言 福嶋教隆	2
エッセイ	
1. 「小島章司フラメンコ舞踊団『ラ・セレスティーナ』 ヘレス公演」 古屋雄一郎	3
2. 「 <i>La fiesta de los jueces</i> を観て」 岡本淳子	4
3. “Estados Unidos renueva su rostro: Más de 50 millones de hispanos en el país” Roberto Negrón	6
留学報告記	
1. 「ラテンアメリカ系移民研究に従事した米国での 1 年間」 牛田千鶴	8
スペイン語圏の旅行記	
1. 「アルメリアと『血の婚礼』」 森直香	9
研究動向	
1. 「日本におけるガリシア語の研究動向」 浅香武和	10
2. “Concha Moreno: Una ebanista en Japón” Pilar Lago Mediante	12
国内外の学会報告	
1. 「The Fourth European Conference on Tone and Intonation (TIE4) 参加報告」 泉水浩隆	13
2. “XXIII Congreso de CANELA” Paula Letelier	14
書評	
1. Alfonso X El Sabio, <i>General Estoria</i> , Coordinador de la edición íntegra: Pedro Sánchez-Prieto Borja, Biblioteca Castro, Fundación José Antonio de Castro, 2009. 上田博人	16
2. David Rojinsky, <i>Companion to Empire. A Genealogy of the Written Word in Spain and New Spain, c. 550-1550</i> , Rodopi, Amsterdam/ New York, 2010. 岡本信照	17
3. 野谷文昭編『メキシコの美の巨星たち』、東京堂出版、2011 年 野谷文昭	18
4. アメリコ・カストロ『葛藤の時代について』、本田誠二訳、 法政大学出版局 2009 年 本田誠二	19
自著紹介	
1. 『スペイン文化事典』を編集して 坂東省次	20
新刊案内	22
国際学会案内	23
編集後記	28

巻頭言

浅学の身でこのような文を綴るのは、非常に僭越なのですが、お求めに従い、日本イスパニヤ学会への感謝の気持ちと、会の展望について、一言述べさせていただきます。



福嶋 教隆

日本で活動する多くのイスパニスタの皆さんと同様、私は日本イスパニヤ学会には大変お世話になってきました。年次大会に初めて出席したのは、1974年10月に東京外国語大学で開かれた第20回大会でした。先生方の研究発表を拝聴し、また特別講演で Fernando Lázaro Carreter 博士の警咳に接することができて感動したものでした。

その後の年次大会では、日本を代表する研究者、文化人ばかりでなく、スペイン語圏から招待された Manuel Alvar, Antonio Quilis, Fernando Sánchez Dragó, Julián Marías, Emilio Alarcos, Emma Martinell, José Luis Abellán, Luis Goytisolo, Aurelio Asiain 各氏らの講演を聴くという、得難い体験を重ねてきました。また、討論会、ワークショップや美術・演劇鑑賞といった変化に富んだ企画にも参加することができました。

大会で行われる研究発表では、いつも刺激を受けました。私も何度か発表に挑戦しましたが、その機会にいただいたご指導ご鞭撻は、貴重な宝となっています。

そして大会の何よりのメリットは、全国の大学・研究施設を訪れ、多くの方と直接知り合えることです。参加するたびに知己が増え、研究教育について新鮮な情報を得ることができ、自分がいかに井の中の蛙であるかを痛感されます。

近年は研究発表者が増えて、「言語」「文学」「文化」「言語教育」といった分科会で、いくつもの発表が同時進行するため、聴きたいものが重なってしまうという、贅沢な悩みが常態化しているのは、ご承知のとおりです。

学会のもう一つの柱である機関誌 *Hispanica* も、非常にありがたい存在です。日本におけるスペイン・イスパノアメリカ研究のエッセンスがここに凝縮されているので、何かを調べたいときには、真っ先に *Hispanica* の掲載論文にあたることにしています。

2004年には、学会創立50周年を記念して、創刊号(1956)から第47号(2003)までの内容を収めたCDが制作されました。さらに2010年より、独立行政法人「科学技術振興機構」の電子ジャーナル公開システム J-STAGE により、最新号までの全論文がウェブ公開されています。かつて私は、創刊号のバックナンバーだけがそろわず困っていたところ、なんとマドリードの Consejo Superior de Investigaciones Científicas (移転前)でこれを見つけ、コピーして日本に持ち帰ったことがあります。今は昔の思いを強く感じます。

昨今、*Hispanica* に投稿される方が非常に多く、採択の関門が大変狭くなっています。しかしこれはまたとない真剣勝負の機会です。若手の方にとっては、奨励賞を狙うダブルチャンスでもあります。原稿の掲載めざして共にがんばりましょう。

学会の今後の発展について、2つほど私見を記します。第1に、会員の皆さんが学会の利用者であるだけでなく、もっと運営の主体となつてくださることを望みます。差しあたっては理事・監査を選ぶ選挙権を積極的に行使していただきたいのです。私は何度か選挙管理に携

わって、投票率の低さを実感しました。かつては日本語版しかなかった選挙の案内文書をスペイン語とのバイリンガルにしたり、ホームページや総会で棄権しないよう呼びかけたりして、改善の努力はしているのですが、なかなか実効がありません。どうか2012年春の選挙では権利を行使してください。インターネット投票のシステム SOLTI を導入するので、皆さんのお手間が少なくなる見込みです。そして女性やスペイン語母語話者も多数含む、バランスのとれた構成の実働チームが学会運営に当たる日が来ることを望んでいます。

第2に、国内外の他学会、研究機関との交流の促進が必要です。たとえば CANELA（日本・スペイン・ラテンアメリカ学会）やセルバンテス文化センターとの協同企画が実現できればいいと思います。また、スペイン語圏は言うに及ばず、アジアの諸国のイスパニスタとの交流も欠かせません。韓国の韓国西語西文学会は『西語西文研究』という、*Hispanica* よりもずっと大部の機関誌を年2回も刊行するほど盛んに研究教育活動を行っています。中国は近年、日本より遥かにスペイン語学習者が増え、厚い研究教育者層を誇っています。台湾、フィリピンなどにも優れたイスパニスタがたくさんいます。私たちは個人的レベルだけでなく、学会としても近隣諸国の仲間と交流を行い、世界の潮流に乗り、リードする気概を持つことが大切だと思います。

ホームページの充実や、この「会報」の発行など、日本イスパニヤ学会は、会員の皆さんの利便のために、きめ細かい活動を続けています。学会を存分に活用し、また学会の発展のために力を合わせましょう。（ふくしま・のりたか 神戸市外国語大学）

【エッセイ1】

「小島章司フラメンコ舞踊団『ラ・セレスティーナ』ヘレス公演」

古屋 雄一郎

もっぱら日本で活動してきた劇団あるいは舞踊団が初めて国外に進出する、その準備がいかに繁雑か、十四ヶ月の作業で骨身に沁みた。

今年2月27日、小島章司フラメンコ舞踊団が初のスペイン公演を行った。会場はヘレス・デ・ラ・フロンテーラ市のビジャマルタ劇場。演目は『ラ・セレスティーナ ～三人のパブロ～』。サブタイトル〈三人のパブロ〉はピカソ、ネルーダ、カザルス。1973年、当時の皇太子・美智子妃両殿下がスペインを訪問し、現地で修行中だった小島氏が王室主催の歓迎式典に招かれ、セビーリャ城で踊りを披露した。同年小島氏が敬愛する〈三人のパブロ〉が相次いで他界。思い出深いこの年をサブタイトルにこめた。

スペインにはフラメンコの大きな祭典がふたつある。ひとつは隔年開催のビエナル・デ・セビーリャ。もうひとつは毎年フェスティバル・デ・ヘレス。今回は後者の招聘公演である。主会場のビジャマルタ劇場に外国の舞踊団が出演するのは過去に例がない。

午後9時開演。1266人収容の劇場は満席。日本のみならずイギリス、カナダ、フランスからも客が来た。振付は鬼才ハビエル・ラトーレ、音楽監督・作曲はギターの名手チクエロ、美術は堀越千秋。フェルナンド・デ・ローハスの原作全21幕を10場に刈りこみ、歌と踊りと演奏だけで物語を進めるノンストップの100分間。〈青の時代〉を髣髴させるピカソ風の美術と照明、カリストとメリベアアの逢瀬の場面ではネルーダの『二十の愛の詩と一つの絶望の歌』から"Me gustas cuando callas"を歌手がうたう。舞踊、音楽、照明、音響が完璧に同調し、カリストの後を追いつつメリベアアが自害するラストシーンではチェロ奏者リト・イグレ

シアスがカザルスの「鳥の歌」を奏で幕が下りる。スタンディングオベーションが十分以上続く。アンダルシア独特の三拍子による拍手足踏みが地鳴りとなり劇場を揺らす。

翌日新聞各紙が一斉に舞台評を掲載した。どれも絶賛である。地元ヘレスの日刊紙 *Diario de Jerez* は「マリオ・マヤ、アントニオ・ガデス、ホセ・グラネーロといった舞台の巨匠たちが開拓した劇場フラメンコ舞踊の、これぞまさしく本物のスペクタクル」「美術から振付まで、衣装から照明まで、どれをとっても全きトータルシアター」「脱帽するほかない。そしてありがとうと言わずにいられない」――

十二年前から制作協力者として舞踊団に関わってきた経緯があり、今回は現地との交渉を一手に任された。企画がスタートしたのは東京初演直後の 2009 年 12 月。照明と音響に関する問題が続出し交渉は難航した。ル テアトル銀座は日本有数の設備を誇る。対してビジャマルタ劇場は収容人数こそ上回るが舞台は非常に狭く設備はきわめて貧弱。スタッフは頭を抱えた。

招聘の内定を受けたのは昨年 9 月初旬。ところが翌月、何の前触れもなく、ヘレスの実行委員会から一方的に交渉破談を告げられた。「舞台芸術をとりまく昨今の困難な状況により」云々。全身から力が抜けた。重い腰を上げて名古屋から東京に出かけ、舞踊団員に経緯を報告する。悔し涙を流す彼らを見るのは忍びなかった。悄然として名古屋に戻る。その四日後、またしても突然「招聘交渉を再開したい」とヘレスからメールが届いた。茫然自失、しかし即座に仕事を再開した。

以後四ヶ月間、寝食を忘れた。度重なる資料の改訂、美術・照明・音響の設計図機材リスト翻訳、日程調整、宿の手配、報道機関への対応等々、スペイン語でやりとりしたメールは五百数十通。出演者スタッフ総勢五十人。12 月末、体が悲鳴を上げた。このまま仕事を続ける代わりに現地への同行は遠慮させてもらった。

本番翌日、ヘレスのテレビ局が撮影したノーカット版ビデオがネット配信され、自宅のデスクトップパソコンのモニター全画面表示で鑑賞した。大喝采のカーテンコール。舞台前に進み出たチクエロが青ざめた顔でうなだれる。小島氏とラトーレが抱きかかえる。二日前父君が交通事故で急逝されたのだ。「芸人は親の死に目に会えない」。ひとつの命が天に召され、地上ではひとつの傑作が命を得た。(ふるや・ゆういちろう スペイン演劇研究家)

【エッセイ 2】

「*La fiesta de los jueces* を観て」

岡本 淳子

スペインに行くと時間が許す限り芝居を観る。チケットが容易に入手でき、直前であっても比較的良い席を取ることができるのが何よりも嬉しい。現地に入ってから適当に観るものを決めるので、当たりはずれはある。2010 年 9 月に Teatros del Canal で観た *La fiesta de los jueces* は大当たり、とても面白かった。

La fiesta de los jueces は、ドイツの劇作家ハインリヒ・フォン・クライストが 1801 年に書いた喜劇『壊れた甕』が下敷きになっている。焼き直しというわけではなく、時は今、司法全体会議のメンバーである優秀な裁判官たちがパーティの出し物として『壊れた甕』を演じるという設定だ。『壊れた甕』について簡単に紹介しておこう。村長兼裁判官のアーダムはある訴訟を抱えている。大切な甕を割られた農婦が、犯人として娘の婚約者を訴えたのだ。婚約者は無実を叫ぶが、裁判は難航する。実は村長のアーダムが犯人なのだ。アーダムは、

娘の婚約者が徴兵され東インドに送られるという偽の書類を作成する。そして兵役免除の書類を渡すことを口実に、真夜中に娘の部屋に入り込み彼女を辱める。甕を割ったのはその時だ。娘も婚約者も、結婚前の娘の名誉を守るために真実を言わない。一方、監査のために村を訪問していた顧問官は裁判所の体面を守るために真実を隠そうとする。アーダムは強引に婚約者を犯人にしようとし、娘を脅したり、示談にしようとしたり、そのなりふり構わぬ傍若無人ぶりが滑稽である。最後には全てが明かされ、アーダムは裁判所から逃げ出す。

La fiesta de los jueces のオープニング、光沢のあるトーガに身を包んだ裁判官が一列に並んでいる。男性5名、女性3名、年齢は30代から60代までと幅があるが、みな知的で洗練されている。代表者が観客に向かってパーティの挨拶をする。裁判官たちは直立不動、真面目な顔でオープニングの歌を歌う。その後、おもむろにトーガを脱ぎ、それぞれの役に合った衣装を身につけ始める。さて、『壊れた甕』の始まりだ。

舞台美術がすばらしい。オープニングの歌が終わると、床を覆っていた赤い布が取り除かれる。なんとシュレッターされた書類が足の踏み場もないほど床一面に広がっている。そのシュレッターされた紙の山は、『壊れた甕』の中で雪の役目を果たすのだが、冒頭から「記録の隠蔽」を視覚的に印象づける。もうひとつ驚くのは、鏡の使い方である。舞台正面奥の壁は鏡になっている。その壁は上部がかなり観客側に傾いている。つまり、演者を背後から、そして多少上から見下ろす視線を観客に与える。それは裏の部分を見せる装置であり、たとえば他の人物に見られないようにする「アッカンベー」が観客には見える。また、傾いた鏡には観客席の前から四列目くらいまでが映っている。三列目に座っていた私は、自分の姿を舞台上に見つけて驚いた。前方の観客はあたかも陪審員であるかのように舞台に参加するのだ。

さて、現代の裁判官が『壊れた甕』を演じることで何が立ち現れるのか？ 公金横領や賄賂、公文書偽造、パワーハラスメントが描かれる作品を演じながら、彼らは時に脱線し私情をはさむ。とりわけ村長アーダムを演じる裁判官は、実生活でアーダム同様のことをしているため、しばしば私的なコメントをする。その主役を演じる俳優サンティアゴ・ラモスの経歴を知ると、この *La fiesta de los jueces* がさらに面白くなる。俳優になる前の彼は法律を学んでいたのだ。司法官志望だった役者が演じる裁判官が演じる墮落した裁判官。何重にもなった入れ子構造が作品を奥行きのあるものにしている。

裁判官たちは『壊れた甕』の上演を途中でやめてしまう。彼らは再びトーガを身に着けるが、カバを飲みすぎてかなり酔っている。オープニングの凛々しい姿とはほど違い、人間味あふれる「普通の」人である。彼らが歌う歌の一つを紹介しよう。

Somos humanos como cualquiera de ustedes (Los jueces)

Tenemos aficiones como cualquier mortal (ustedes)

Ir de caza mayor con ministros y sin mujeres

Entendemos de vino más que cualquier campesino

Y en la capital asistimos como muy buenos vecinos

A eventos elegantes, sociales y muy distinguidos

Para adquirir

Para sentir

Para lucir

Para exhibir
Un buen vivir que nos dé al fin
Un poquitín (Hoy es así. No hay que mentir) de popularidad.

日本でも某地検での証拠改ざん事件が記憶に新しい。権力者の汚職というのは時間と空間を越えて存在し続けるのだろう、残念ながら。(おかもと・じゅんこ 大阪大学)



【エッセイ 3】

“Estados Unidos renueva su rostro: Más de 50 millones de hispanos en el país”

Roberto Negrón

Según los resultados de la Oficina Federal del Censo 2010 de los Estados Unidos, la población hispana en este país ha incrementado a más de 50 millones durante la primera década del siglo XXI, en otras palabras, uno de cada seis estadounidenses es de descendencia hispana, o al menos, así lo dejaron saber al indicar en el encasillado “hispano o latino” del cuestionario del censo. Ahora la población hispana compone el 16% de los 308,7 millones de habitantes del país (196,8 millones de blancos no hispanos, 50,5 millones de hispanos, 37,7 millones de negros y 14,5 millones de asiáticos), siguiendo de esta forma como el grupo minoritario de mayor población desde los años 90 del siglo pasado; sin embargo, en algunos distritos y condados de estados con mayor población hispana lidera como grupo mayoritario.

Más del 75% de los cincuenta millones de hispanos vive principalmente en nueve estados de tradición demográfica hispana: Arizona, California, Colorado, Florida, Illinois, Nuevo México, Nueva Jersey, Nueva York y Texas. No obstante, en esta última década la población hispana se duplicó en estados que no eran tradicionalmente centros de población latina, especialmente en los estados del sur del país: Carolina del Sur, Carolina del Norte, Alabama, Tennessee, Misisipi, Kentucky, Luisiana y Arkansas. Esto nos demuestra una tendencia de esta población a desplazarse hacia la región sureste y central de los Estados Unidos, alejándose de los suburbios y los centros urbanos.

De acuerdo con el Centro Hispano Pew de Investigación, el origen de la población hispana sigue encabezado en este censo por los mexicanos con un 65,5 %, seguido por los puertorriqueños con un 9,1%; en cambio, los salvadoreños se convierten por primera vez

en el tercer grupo con un 3,6%, colocando de esta manera a los cubanos en la cuarta posición con un 3,5%, seguido por los colombianos con 1,9% y los hondureños con 1,3%.

No cabe duda que estos resultados del Censo 2010 sitúan a los Estados Unidos como el segundo país con más habitantes hispanos en el mundo, después de México con una población de 112 millones (censo mexicano 2010); y para muchos, como para el director de la Academia Norteamericana de la Lengua Española, Gerardo Piñas-Rosales, este crecimiento poblacional hispano en los EE.UU. marca el comienzo de una nueva modalidad cultural hispana y un nuevo futuro para la lengua española en el mundo.

El futuro del español está en los Estados Unidos:

¿Por qué el futuro del español está en los Estados Unidos? Son varias las razones: en primer lugar, la comunidad hispana es el grupo de mayor crecimiento en el país, y según las proyecciones de la Oficina del Censo de EE. UU., llegará a sobrepasar los 100 millones para el año 2050; muchos de ellos con el español como lengua materna o segunda lengua; en segundo lugar, los medios estadounidenses, incluidos los medios de comunicación norteamericanos con sus programaciones bilingües, así como las compañías de telecomunicaciones en español de EE.UU. ejercen una gran influencia sobre el español hispano y el de América Latina; en tercer lugar, las editoriales norteamericanas publican cada vez más en la lengua de Cervantes con el fin de ganar presencia en el mercado hispano del país; en cuarto lugar, los Estados Unidos cuenta con los primeros medios globalizados y es uno de los países con más redes cibernéticas en español en todo el mundo; y finalmente en Estados Unidos es donde más se aprende esta lengua romance, tanto en las escuelas secundarias como en instituciones universitarias y academias de lenguas. Todo esto a pesar de que el español sigue siendo objeto de ataques de movimientos hispanóforos, como el de la ley del 'English Only' y el de la campaña del 'English First', en la mayoría de los estados.

El español es la segunda lengua de mayor importancia en los Estados Unidos, y como ha reafirmado el poeta argentino-estadounidense, Luis Alberto Ambroggio, en su visita a la Ciudad de México, que "el español en Estados Unidos no va a dejar de existir sino que va a continuar creciendo"; igualmente lo ha asegurado el secretario general de la Asociación de las Academias de la Lengua Española, Humberto López Morales, en su discurso de investidura como doctor honoris causa por la Universidad de Valencia: "para el 2050 Estados Unidos se convertirá en el primer país con más hispanohablantes en todo el mundo".

¿Cómo será el español en los Estados Unidos? Según Atanasio Herranz, representante de la Academia Hondureña de la Lengua, el español en Estados Unidos está adquiriendo las características de "lengua total, global, neutral; un dialecto estándar, una variedad única de síntesis, no de dominio de un dialecto sobre otro, y tiende a la comprensión y la negociación". Definitivamente, hoy en día ya no se debe hablar de 'el español en Estados Unidos', sino de 'el español de los Estados Unidos'. (Roberto Negrón 京都外国語大学)

【留学報告記 1】

「ラテンアメリカ系移民研究に従事した米国での 1 年間」

牛田 千鶴

2010 年 8 月末までの 1 年間、筆者はフルブライト研究員として、プリンストン大学人口研究所に留学した。渡米直後は、掃除道具・調理器具・寝具などの調達、車の購入、医療保険・自動車保険・インターネット・電話・ケーブルテレビなどの各種契約手続き、大学人事課への提出書類の作成や身分証明証・駐車許可証の申請などに追われたが、ほどなく生活のリズムも安定した。自然豊かな環境の中、小鳥のさえずりで目を覚まし、うさぎやリスの姿を窓越しに眺めて朝食を済ませ、鹿との遭遇に気をつけながら車通勤を続ける毎日であった。

プリンストン大学人口研究所には当時、34 名の教員、10 名の事務職員、12 名のポスドク研究員、7 名のプロジェクト研究員、5 名の情報専門職員、2 名の司書、30 名の大学院生に、私を含む 3 名の客員研究員を加えた計 103 名が所属していた。毎週火曜日の正午には、研究所の大ホールで昼食付きセミナーが開催され、学内外の研究者による最新の研究成果報告を聴くことができた。美味しいインド料理や中華料理に飲み物やデザートまで付くとあって、毎回席が足りなくなるほどの盛況ぶりであった。これもある種の米国式合理主義なのだろうが、昼休みの時間を有効に活用して皆で学び、活発な議論を交わすことのできる絶好の機会であった。セミナー後も引き続き、米国、ブラジル、メキシコ、ベネズエラ、チリ、トルコ、スペイン、ドイツ、ベルギー、中国など様々な国籍を持つ仲間たちとその日の研究報告について意見交換を行ない、時には批判的な見解で盛り上がることもあった。

留学期間前半は、拙著『ラティーノのエスニシティとバイリンガル教育』（明石書店／2010 年 3 月刊）の校正作業にかなりの時間を費やすこととなったが、2009 年 11 月中旬には、ニューメキシコ州アルバカーキ市で開催された「双方向型バイリンガル教育」学会に出席した。研究者や教員、教育局関係者ら 1200 名を超える出席者があり、バイリンガル教育の著名な理論家であるトロント大学（カナダ）のジム・カミズ教授が基調講演を行なった。同教授をはじめ重鎮研究者らと直接言葉を交わす機会が得られたのもさることながら、同じ研究分野に関心を持つ人々とのネットワーク作りという点でも、非常に中身の濃い 4 日間であった。同 12 月には、プリンストン大学移民開発センター主催セミナーにおいて研究発表を行ない、2010 年 1～2 月には、ニュージャージー州内のバイリンガル小学校を訪問して聞き取り調査を実施した。

留学期間後半は、学会等での研究報告により一層集中して取り組んだ。2010 年 4 月中旬には、ネブラスカ大学オマハ校ラティーノ／ラテンアメリカ研究所主催の *Cumbre 2010* に出席し、“Global Education and Local Community Engagement”をテーマに掲げる部会で研究報告を行なった。4 月下旬には、ジョージタウン大学（ワシントン DC）で開催されたフルブライト研究員対象セミナー（国務省主催）にも出席した。同セミナーでは、50 カ国以上から

集った120名のフルブライターらとともに、「大学がなすべき社会貢献とは何か」について、ともに学び議論する貴重な機会を得た。また4月末には、再びプリンストン大学移民開発センターより研究報告を依頼され、“Language and Empowerment among Second Generation Hispanics”と題する発表を行なった。

2010年5月には、カリフォルニア州バイリンガル教育協会、イリノイ州多言語・多文化教育協会等の共催による *AMME: Alliance for Multilingual Multicultural Education* の大会において、シンポジウムのパネリスト（他5名）を務めた。また5月末から6月初頭にかけては、スペインのバルセロナ自治大学からの招聘により、同大博士課程の学生ならびに移民研究者を対象として、米国での研究成果を基に、在米ラテンアメリカ系移民児童・生徒のエスニック・アイデンティティと言語運用能力・学習到達度に関する報告を行なった。このほか、6月にニューヨークで開催された社会奉仕活動関連の学会や、8月にアトランタで開催されたアメリカ社会学会にも出席した。

今回の留学では、学会やセミナー等で研究報告する機会に恵まれ、その度に、米国をはじめ諸外国の研究者らとの交流を深めることができた。今後は、留学先で得たネットワークを基に国境を越えた共同研究を進めるとともに、教育の場を通じ、より多くの学生たちに研究成果を還元していきたいと願っている。

*本稿には、*The Fulbrighter* (No. 28)に掲載された拙文と一部重複する部分がある。

(うしだ・ちづる 南山大学)

【スペイン語圏の旅行記1】

「アルメリアと『血の婚礼』」

森 直香

私は卒業論文のテーマとしてロルカの三大悲劇をテーマに選んだ。その三大悲劇のひとつ『血の婚礼』の舞台となったのはアルメリア県の小さな村、ニハルの郊外であったが、昨年初めて訪れるまで、その地を知ることもなかった。

2010年の夏、旧来の友人がそのニハルにほど近い村、ロケタス・デ・マルに夏の間だけアパートを借りたと言うので、1週間ほど滞在させてもらうことにした。ロケタス・デ・マルはアルメリア市からは20キロほどの所に位置し、村といっても人口は約8万5千人でアンダルシアの中では14番目の多さである。地中海に面したリゾート地で、長期滞在の外国人、特にイギリス人、ドイツ人が多い。また、近年は周辺のトマト農家で働くアフリカからの移民も多く居住し、なかなか国際色豊かである。

私が滞在した8月末はまだ暑さが厳しく、日中は40度を超えることも度々であった。海辺の村なので湿度も高く、日陰のテラスでビールでも飲むか、海で泳ぐかしてないと耐えられない。『血の婚礼』の登場人物たちはアルメリアの暑さにさかんに不満を述べていたが、それも当然だと納得する過酷さであった。

ある日、『血の婚礼』の舞台を見てみたいと、友人の運転でニハルに出かけた。作品のモデルとなった殺人事件は、ニハル郊外で起きたのである。ニハルへの道中、私たちの目前に広がるのはアルメリアの砂漠ではなくトマト栽培のビニールハウスで、白いビニールがあたり一面を覆い、まるで白い海の中に伸びる道を走っているかのように感じた。聞くところによると、80年代ごろからこのトマト栽培が盛んになり、投資した人々はかなりの財をなしたとのことである。ハウスではアフリカ系移民たちが多く働くが、中は40度を超える暑さという

過酷な労働環境である。このような外国人移民たちがスペインの農業を支えているのである。

ニハルの観光案内所で、ロルカに興味があるのならコルティホ・デ・フライレ (Cortijo del Fraile) を訪れるようにと言われた。モデルとなった事件はこの場所で起こったということである。道中、私は友人に『血の婚礼』の中で「黄褐色の台地」と表現されていたアルメリアの砂漠はどこにあるのかと尋ねた。すると友人は笑いながら「砂漠なら目の前にあるじゃないの」と、道の両側に延々と連なる禿げ山を指差した。大量に砂があるのが砂漠だと信じていた私は大層驚いた。そんな私に彼女は「木が生えてないのだから、砂がなくても *desierto* に決まっているじゃないの」と言い、今さらながらに私は日本語の「砂漠」とスペイン語の“*desierto*”の違いに気が付いたのであった。

コルティホ・デ・フライレまでの道は舗装されておらず、車は相当揺れた。この揺れがもう少し続いたら完全に車酔いしてしまうなと思ったころ、ようやく目的地にたどり着いた。それは廃墟と言ってもいいような古い建物で、周りには黄色い大地が広がるばかりであった。案内板によれば 18 世紀にドミニコ会士たちが建てた建物で、この場所は『血の婚礼』のモデルとなっただけでなく、マカロニ・ウエスタンの名作『続・夕陽のガンマン』(セルジオ・レオーネ監督、クリント・イーストウッド主演、1966 年) のロケ地でもあったということであった。なるほど建物の内部は映画でイーライ・ウォラック演じるトゥーコの家族らが寝ていた家と似ているように感じた。

世界的な名作ふたつの舞台になったにもかかわらず訪れる人はほとんどおらず、まるでその場所だけ時の流れから取り残されているようだった。人気のないその場所で、私は 20 世紀初頭のスペインにいるような、同時に、19 世紀、南北戦争中のニューメキシコにいるような、不思議な気持ちになったのであった。(もり・なおか 静岡県立大学)



Cortijo del Fraile (Parque Natural de abo de Gata-Níjar)

【研究動向 1】

「日本におけるガリシア語の研究動向」

浅香 武和

ガリシア語は、スペインの北西部で使われているロマンス語系の言語であることは、すでに知られているが、日本ではガリシア語学科がある大学は一つも存在しないのが現状である。スペインの言語について記すと、カタルーニャ語もバスク語も大学には学科はないが、特別

に研究外国語としては細々とではあるが研究は進められているし、特別講座としての講義もあるようだ。ガリシア語については、学習院大学生涯学習センターで2010年度の春期と秋期の講座で、「世界を知る」のなかで「スペインのガリシア」についての講義をすることができた。しかし、まだガリシアの知名度は低いのが実情である。

さて、私が初めてガリシア語に関心を寄せたのは、1975年秋マドリードのコレヒオ・マヨール・ユニベルシタリオ・サンティアゴ・アポストルで、マヌエル・アルバル博士の「イベリア半島における言語と方言」に関する講演を聴いてから、関心を持ったのがはじまりであった。そして、1977年から78年に東京外国語大学ポルトガル語学科の池上岑夫先生の「ポルトガル語学概論」を聴講して、そのなかでガリシア語について伺うことができた。1984年に池上は『ポルトガル語とガリシア語—その成立と展開』を大学書林から著した。

その後、私はサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学ガリシア語研究所主催の「ガリシア語コース」を数年にわたり受講して、その成果をガリシア語三部作(文法書・会話集・語彙集)として大学書林より発表することができた。少数言語に関する書籍を刊行している大学書林には感謝の念を表わさずにはいられない。

日本においてガリシア語学の研究は、秦、大岩、浅香、黒沢、北村らによりすすめられ、近年では柿原が学会誌に論考を寄せている。残念ながら、現在、ガリシア語学に関する学会または研究会組織はない。しかし、NPO法人日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会は、数年前に設立されて会員数も数百人いるということで、中年層を中心に活動しているらしい。研究会や勉強会の立ち上げは、なかなか難しい問題がある。こうしたなかで、2005年に同学社より坂東省次・浅香武和編『スペインとポルトガルのことば』を刊行した。この書は、イベリア半島のさまざまな言語、すなわち、カスティーリャ語、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語、バレンシア語、アストゥリアス語、アラゴン語、アラン語、ポルトガル語、ミランダ語について社会言語学的観点から研究を試みたものである。さらに、文部科学省日本学術振興会基盤研究として「現代スペインにおける諸言語の統語的研究」(科研費研究2007-2009)福嶋教隆、長谷川信弥、浅香武和、吉田浩美の共同研究がある。これには、カスティーリャ語、カタルーニャ語、ガリシア語、バスク語の比較および対照研究がまとめられている。報告書は、残部が僅かあるので、関心のある方には頒布いたします。上記四名での共同研究は「現代スペインにおける諸言語の語彙に関する対比的な研究」として続行中である。

最新の出版物としては、明石書店『スペインのガリシアを知るための50章』が2011年3月に上梓されたばかりである。明石書店の「・・・を知る」エリア・スタディーズは、これまで87冊が刊行されており、いずれも国を扱ったものであるが、今回の88冊目はスペインのガリシアという地方を取り上げたものとしては最初であり、魅惑あるケルトの地・ガリシアの全貌を知るには最適な書である。この本は、多くの執筆者が参加して、歴史、巡礼、美術、音楽、建築、食文化、伝統工芸、生活、スポーツ、言語、文学、政治、経済、産業、人物交流、移民など、さまざまな面からガリシアを紹介している。日本に於いてガリシアの全体を知るための唯一の書として、また教養書としても推薦できるものである。

最後に、ガリシア語から世界に広まった語を二つあげたい。ひとつは、地理学用語として誰でも知っているリアス式海岸のリアスは、ríaの複数形である。もうひとつは、酪農家を使うサイロ silo である。これらの語は、ガリシア人の名字のなかに、リーアさん、シーロさんとしても存在している。(あさか・たけかず 津田塾大学)

【研究動向 2】

“Concha Moreno: Una ebanista en Japón”

Pilar Lago Mediante

Concha Moreno, de la que omitimos presentaciones por ser de todos sobradamente conocida, ha estado en Japón el pasado mes de noviembre invitada por el Grupo de Investigación Sobre la Didáctica del Español (GIDE) para dar una serie de conferencias y seminarios. Aprovechando esta grata oportunidad, nos hemos acercado a ella para preguntarle su opinión sobre ciertos temas que no trató en sus charlas, como pueden ser la visión que lleva consigo de la enseñanza del español en este país o lo vivido durante estas dos semanas pasadas con nosotros.

Pregunta: Cuando viajamos a un país por primera vez, solemos meter en la maleta los juicios que hemos ido construyendo sobre él a lo largo del tiempo. ¿Venía usted también equipada en este sentido?

Respuesta: Venir a Japón era para mí una asignatura pendiente. Sé que esto suena a tópico, pero en mi caso es una realidad. Mis primeros contactos con alumnado japonés no fueron muy exitosos. Tuve alumnos (chicos) siendo yo muy joven e inexperta y creí que la manera de acercarse a ellos debía ser la misma que me había funcionado tan bien con los de otras nacionalidades. No fue así. Yo sabía muy poco –en realidad nada– de la manera de ser de los japoneses y mis ideas sobre ellos se construyeron sobre esas relaciones. Es decir, que sí, me creé unos estereotipos: los japoneses son poco comunicativos, reservados, respetuosos de las tradiciones; no desean expresar sus opiniones en público... Por eso creo que he venido «a tiempo»; quiero decir que necesitaba madurez para acercarme a esta cultura.

Pregunta: Y una vez aquí, ¿se han solidificado aún más sus pareceres o algunos de ellos se han desbaratado?

Respuesta: La invitación de GIDE ha sido para mí un honor –y no lo digo por cumplir–. Es que con esa experiencia previa, nunca pensé que me ocurriría algo así. Los miembros de GIDE me elaboraron un programa de trabajo intenso, pero también me han permitido conocer un poquito los lugares por los que he pasado. Y me ha sorprendido la calidez que las personas japonesas del grupo me han transmitido. Ha ido más allá de la pura cortesía que me esperaba.

Y en el terreno profesional, me he encontrado con un grupo de personas que trabaja duro y en serio para renovar el panorama metodológico en la medida de sus posibilidades. Puedo decir que nuestros contactos de preparación del viaje, de las conferencias y los talleres fueron intensos, me atrevería a decir que perseguían la perfección de los detalles.

Pregunta: Durante las dos semanas que ha pasado aquí ha desplegado una actividad incansable dando conferencias en prestigiosas universidades. ¿Qué impresión lleva de esta experiencia?

Respuesta: He visto un público motivado, con un interés muy grande, respetuoso con mi trabajo. Por otro lado, tuve la oportunidad de observar algunas clases y pude impartir alguna. Fue emocionante encontrarme de nuevo con un grupo de alumnos y alumnas

tantos años después. Logré mi objetivo: conseguir que se comunicaran sin forzarlos del todo, pero sí incitándolos a ello. El análisis de la grabación de aquella clase, me enseñó mucho sobre mí misma.

Pregunta: Asimismo, y coincidiendo con el LVI Congreso anual de la Asociación Japonesa de Hispanistas celebrado los días 30 y 31 del pasado mes de octubre en la Universidad de Osaka, llevó a cabo un taller en colaboración con los miembros de GIDE titulado *El papel del profesorado en el aula de ELE* que contó con asistencia de numerosos profesionales de la enseñanza. En ese taller, a los que la escuchamos, nos invadió la sensación de que en su afanosa carpintería se ensamblan las tablas no solo con el saber, sino también con el cariño y la pasión. Esta obra de taracea, ¿nos viene dada o logramos aprenderla?

Respuesta: ¡Cuánto me sube la moral saber esto! La verdad es que creo que el saber se adquiere; la experiencia enseña a aprender de los propios errores. Creo también que es fundamental la reflexión sobre el propio hacer; no basta con repetir rutinas; es imprescindible plantearse objetivos y analizar hasta qué punto se han conseguido y, después, analizar las causas de los éxitos y de los fallos. Además de todo eso, el componente afectivo es consustancial a mi manera de concebir la enseñanza, la pasión por defender y aplicar mis creencias y experiencia también forman parte de mi manera de ser. Pero creo que se puede ser un / una gran profesional sin ser tan apasionado/a como lo soy yo.

Pregunta: No quiero terminar sin pedirle un pequeño consejo que nos ayude a todos a manejar bien las herramientas y los materiales de este oficio...

Respuesta: Es difícil dar consejos, pero si pienso en mí misma y en lo que a mí me ha ayudado, diría que es fundamental aprender constantemente de todo, también del alumnado; no creer que se ha llegado; no ser dogmática a la hora de seguir un método o enfoque, sino tener en cuenta al alumnado con sus intereses y necesidades. Y amar lo que se hace. En fin, menos mal que no quería dar consejos. Pero es que me entusiasmo y me enrolló.

Pregunta: Muchas gracias, Concha, por todo el bagaje de experiencia que ha traído consigo y por los ánimos que ha mostrado a la hora de transmitirla. Mediante su entusiasmo y saber hacer ha conseguido que sus propuestas se erijan como referentes para todos nosotros. (Pilar Lago Mediante 獨協大学)

【国内外の学会報告 1】

「The Fourth European Conference on Tone and Intonation (TIE4) 参加報告」

泉水 浩隆

2010年9月9日～11日、The Fourth European Conference on Tone and Intonation (TIE4) がスウェーデン・ストックホルム大学（フレスカーティ・キャンパス）を会場として行われた。この国際会議はスペイン語学を中心的に扱ったものではないので、ここで報告するのはやや場違いではないかという懸念も抱いている。しかし、ここのところスペイン語の韻律に関する研究が以前と比べかなり増えており、今回の学会においてもスペイン語やロマンス諸語に関するさまざまな報告があったため、あえて紹介させていただく次第である。

近年、音声学の分野においては、音調やイントネーションに関する諸現象が注目されているが、本国際会議もこの領域の研究に特化して行われているものである。第1回の会議は2004年にギリシャ・サントリーニで開かれ、その後、2006年にドイツ・ベルリンで第2回、2008年にポルトガル・リスボンで第3回と、2年に1回のペースで開催されている。今回はこれに続き4回目となる。

本国際会議のサイト (<http://www.nordiska.su.se/pub/jsp/polopoly.jsp?d=13236>) によれば、3日間の会期中、25の口頭発表、40のポスター発表が行われた。学会事務局より配布されたリストでは、参加者として84名の氏名が掲載されており、著者としてプログラムに名前を連ねている研究者の数は100名を超えている。今回日本から参加したのは清泉女子大学の木村琢也先生と筆者の2名のみで、ほか2名の研究者との共同研究による“On sentence-type discrimination strategies of Japanese learners of Spanish”のポスター発表を行った。この他、日本人研究者としてはドイツから1名の参加があった。一方、スペインからは11名の研究者が来ており、その中には、*Teorías de la entonación* (Madrid: Ariel, 2003) など、特にスペイン語およびカタルーニャ語のイントネーション研究で多数の著書・論文のある Institució Catalana de Recerca i Estudis Avançats / Universitat Pompeu Fabra の Pilar Prieto 氏をはじめ、2008年グラナダで行われた IV Congreso de Fonética Experimental で初めてお会いし、今回再会の機会を得た Universitat de Barcelona の Ana María Fernández-Planas 氏、スペイン語およびバスク語の音声研究を活発に行っている Universitat de les Illes Balears の Gorka Elordieta 氏など、この分野で国際的に知られた研究者も参加していた。このような研究者との知己を得ることができたのは大変有益であり、また刺激的であった。この他にも Université Aix-Marseille の Mariapaola D'Imperio 氏、Radboud University Nijmegen の Carlos Gussenhoven 氏、Universidade de Lisboa の Sónia Frota 氏など著名な研究者も多く参加した（所属はプログラム掲載のものによる）。

学会における発表言語は英語であったが、英語やドイツ語、あるいは、フランス語、スペイン語、カタルーニャ語、ポルトガル語、イタリア語などのロマンス諸語、さらにはトルコ語や広東語、サーミ語、バンツ語など世界各地の言語について幅広い報告がなされ、さまざまな情報を得る貴重な機会になった。また、スペインからの参加者とはポスターを前にスペイン語で直接質疑応答する機会もあり、示唆にとんだ意見をいただくことができた。

ストックホルム大学のキャンパスは緑も多く、広々とした快適なところで、濃密な内容かつ慣れない英語によるセッションで疲労を覚えた後、コーヒブレークの際に眺める北欧の風景にはほっと落ち着くものがあった。また、2日目のプログラムの後は、キャンパスから場所を移し、ノーベル賞の祝賀晩餐会会場としてつとに有名であるストックホルム市庁舎でレセプションが行われた。プリンス・ギャラリーでの立食パーティでは、メーラレン湖の水面に映る市街地が徐々に夕暮れに包まれていくのが大きな窓から見え、印象的であった。

(せんすい・ひろたか 南山大学)

【国内外の学会報告2】

“XXIII Congreso de CANELA”

Paula Letelier

El XXIII Congreso de la Confederación Académica Nipona Española y Latinoamericana, CANELA, se realizó los días 28 y 29 de mayo en la Universidad de Estudios Extranjeros

de Kioto, gracias a la valiosa cooperación de los profesores Shoji Bando, Reiko Tateiwa y Keishi Yasuda.

Durante los dos días del congreso se presentaron tres conferencias plenarias: la primera de ellas, encargada de abrir el Congreso, estuvo a cargo del Profesor Noritaka Fukushima, quien nos habló sobre “Las expresiones de rol — ¿Cómo se traducen los *mangas* al español?—”. En el idioma japonés existen expresiones que denotan el rol del hablante, este fenómeno se presenta en el habla ficticia: novelas, dramas, chistes, cómics y dibujos animados. Por ejemplo, reconocemos a un doctor o a un samurai por su léxico, por las partículas finales o por la morfosintaxis. El profesor Fukushima nos explicó que en el idioma español también existen algunos personajes a quienes reconocemos por sus expresiones.

Luego, por la tarde, se presentó Francisco García Serrano, profesor de la Universidad Saint Louis de Madrid, quien se encuentra en Japón durante un semestre, como profesor invitado en la Universidad Sophia de Tokio. Él nos hizo reflexionar sobre la identidad española, concepto que provoca debate y controversia. Retrocedimos hasta la Edad Media para conocer las diferentes interpretaciones sobre la idea de España en las crónicas de la época.

El día domingo, los profesores Sae Ochiai y Juan Carlos Moyano, nos hablaron sobre la trayectoria de GIDE, grupo que se dedica a la investigación sobre la didáctica de la lengua española. Su interesante historia nos motiva a seguir su ejemplo y crear grupos de trabajo que se dediquen a la profundización de la teoría de Ele y posterior puesta en práctica en nuestras clases. Una anécdota motivante que nos puede hacer reflexionar, fue su relato sobre el inicio de GIDE, cuando un grupo de profesores se juntó para conversar sobre sus problemas en el aula, para luego, con el correr del tiempo cambiar el sujeto de reflexión y centrarse en las necesidades de los estudiantes en la clase de ELE.

Las ponencias de los miembros de CANELA estuvieron divididas en las tres secciones que conforman el eje central de la confederación, estas son: Literatura, Pensamiento e Historia y Metodología de la Enseñanza de la Lengua Española. Dentro de estas secciones los profesores participantes pueden profundizar en sus conocimientos y discutir sobre el resultado de sus investigaciones. En esta ocasión se presentaron 12 ponencias, algunos títulos pueden demostrar la amplia variedad de contenidos que fueron expuestos, por ejemplo: “La poesía de Gabriel Said”, “Las comedias históricas de José Zorrilla”, “La construcción del jardín japonés y su efecto en Latinoamérica”, “Una perspectiva sobre los valores culturales en la identidad catalana”, “Observaciones sobre la cooperación entre profesores hispanohablantes y japoneses” y “Aplicaciones prácticas para el desarrollo de las estrategias de lectura en la clase de ELE”.

En la clausura del congreso se presentó la nueva Junta directiva presidida por la profesora Reiko Tateiwa. Ella nos adelantó que el próximo año el Congreso de CANELA se realizará en la Universidad Nanzan.

Los interesados en obtener más información sobre CANELA, pueden visitar nuestra página web: <http://canela.org.es/>

(Paula Letelier 関西外国語大学)

【書評 1】

Alfonso X El Sabio, *General Estoria*, Coordinador de la edición íntegra: Pedro Sánchez-Prieto Borja, Biblioteca Castro, Fundación José Antonio de Castro, 2009.

上田 博人

アルフォンソ X 世賢王『世界史』*General Estoria* は中世スペイン語文献学の第一級の資料である。旧約聖書(Vulgata)を主な典拠とするが、西洋古典・アラビア語・ヘブライ語文献にも依拠する。ラテン語などの書き言葉ではなく、話し言葉で記された世界史の編纂は当時 13 世紀においてスペインだけでなく西洋史上比類のない大事業であった。このような規模の歴史書を個人で編纂することは当然不可能であり、それは推進役としての賢王の熱意と、それに従う博識者たちの協力によって成就したものである。賢王の関わり方はおそらく監修と序文など一部の執筆に限られていたであろう。事実、冒頭の序文に次のように記されている(下線は筆者)。“[...], yo don Alfonso, [...], después que ove fecho ayuntar muchos escritos e muchas estorias de los fechos antiguos escogí d'ellos los más verdaderos e los mejores que y sope e fiz ende fazer este libro.”

本書は長い間写本でのみ伝わり、El Escorial 修道院や Madrid の国立図書館などに所蔵されたまま今日まで全巻が出版されることはなかった。これを 21 世紀に完成させたのは、アルカラ大学のスペイン語文献学教授 Pedro Sánchez-Prieto Borja とその編纂グループ(Bautista Horcajada Diezma, Carmen Fernández López, Verónica Gómez Ortiz, Belén Almeida, Inés Fernández Ordóñez, Raúl Orellana, Elena Trujillo)である。全体は 5 部(I: 1580p., II: 1839p., III: 1443p., IV: 1287p., V: 1227p.)で構成され、各部 2 冊に分かれている。

主幹の Sánchez-Prieto は中世スペイン語文献学が専門で、中世と近代を含めた膨大な公文書を言語史資料として供するために刊行を続けている。転写については自らの立場を明らかにし古文の編纂法を確立してきた。彼の研究チームによる「Corpus de Documentos Españoles Anteriores a 1700」(CODEA)はスペイン語史の多くの研究で利用されている。

Sánchez-Prieto は実証を重んじ、厳密な批判的研究を行なっている。スペイン語文献学史であたかも定説のように扱われてきた、賢王による中世正書法の確立については、賢王を特出させるのではなく、むしろ先行する書記法の伝統の中に位置づけるべきであると述べ、それを父王フェルナンド三世時代の公文書の精査によって裏付けた。また、12-13 世紀に多く見られた語末母音脱落形(*adelant, end, cort, noch, etc.*)が 13 世紀後半に母音(音声)を回復して完全形(*adelante, ende, corte, noche, etc.*)となったのは賢王の関与による、とする Rafael Lapesa の説に疑義を呈している。

先に一部を引用した賢王による序文(約 430 語)を読むと、確かに Lapesa が言うように *ende, complidamiento, este, ciertamiento, onde* など完全形がしっかりと書かれている。一方、本文には語末脱落形が散見され、その分布は一様ではない。たとえば本書第 I 部 1 巻(I-1: 約 205, 000 語)と第 IV 部(IV: 約 453, 000 語)で調べてみると語尾脱落形(*end*)がそれぞれ 6 語と 71 語であり、完全形(*ende*)が 280 語と 419 語である。また *adelant(e)*を調べると語尾脱落形(I-1, 12 語: IV, 350 語) / 完全形(I-1, 350 語: IV, 3 語)という結果になった。このように、序文に続く第 I 部 1 巻で語尾脱落形が圧倒的に少ないのは賢王がこの部分の草稿に綿密に目を通したためであるかも知れない。それならば、現代スペイン語が語尾脱落を一部の語(*algún, gran, san, etc.*)だけに食い止めたのは賢王の力によると見るべきであろうか。

Sánchez-Prieto の CODEA の資料を調べると、*apócope* は 13 世紀前半において、とくに

Aragón に集中して頻発しているが、時代・地域の限定を超えて 14-15 世紀においても各地に持続して観察される。筆者は 13 世紀初めに公証文書に多発する apócope は当時スペインに移住したフランス教養人がもたらしたフランス語風のく書き方が一時期多く文献に表出したものだと考える。一方、カスティーリャ語く音声>史における同現象は、それが顕著なアラゴン方言と、母音を保持するレオン方言の中間地域にあって揺れるカスティーリャ方言の自然な音韻変化であったと考える。自然な音韻変化は語末の弱勢母音の脱落と、*-nd*, *-nt*, *-st* など重い語尾を生む「極端な語尾脱落」(«apócope extrema»)の回避という 2 つの傾向の拮抗関係を作り、最終的に民衆のスペイン語は一般的な形態であった後者を選択したのであろう。よって賢王は文書のく書き方を伝統に従ってカスティーリャ語式に矯正したのであって、それがく音声>史を方向づけたことにはならない。このように語末母音脱落に関する Lapesa の説は *General Estoria* のく正書法>に限定すれば確認される(可能性がある)。それに対する Sánchez-Prieto の反論は CODEA の広範な地域・時代資料によって再認できる。

中世スペイン語文献学は現在でも多くの論争点を含んでいる。スペイン語の歴史に接近するには資料の精査が必須であるが、ここに貴重な記念碑的資料が刊行されたことはまさに僥倖とすべきである。*General Estoria* の書誌情報と Sánchez-Prieto の研究グループの成果は次のサイトで見ることができる。

(<http://www.fundcastro.org/microsite.html> <http://textoshispanicos.es>)

(うえだ・ひろと 東京大学)

【書評 2】

David Rojinsky, *Companion to Empire. A Genealogy of the Written Word in Spain and New Spain, c. 550-1550*, Rodopi, Amsterdam/ New York, 2010.

岡本 信照

本書によって評者は「ポストフィロロジ」 という術語の存在を初めて知った(もともと、この術語は著者のオリジナルではないようだが)。19 世紀以来の伝統的なフィロロジは言語の歴史的連続性を説明することに邁進してきたと言ってよい。すなわち、音韻変化法則を土台として、類推、同化、異化、音位転置、その他語形変化の法則性や一般傾向を示すタームを駆使しながら過去と現在を繋ぐ連続性の記述を構築してきた。ところが、ポストコロニアル思想と結託したポストフィロロジは言語体系の一貫性を想定したりせず、言語の歴史における断絶や不連続性の方に着目する。従来のフィロロジが言語の自然進化的観点に立脚したものだったとするなら、ポストフィロロジは「言語を表記する」という行為そのものに着目し、むしろ言語史の人為的側面を重視する。「いかに話し方が変化してきたか」ではなく、「いかに書かれるようになったか」の歴史だと言ってもよい。「なぜ現代語に文法の不規則や例外があるのか」を説明するには伝統的フィロロジで十分だが、「なぜある特定の俗語変種があるとき規範として地域を超えて広まるようになったのか」などの問いに答えるときはポストフィロロジの出番となる。この方法論をスペイン語史に適用したのが、カナダ・トロント大学准教授のスペイン語学者によって著された本書である。表題がネブリハの“*compañera del imperio*”の英訳であることは一目瞭然だが、ネブリハ論に特化した内容というわけではなく、あくまで象徴的な意味合いで用いたものと思われる。「序章」に書かれた著者の言を借りるなら「中近世スペイン語圏文化における表記すること(writing)の概念化と、その移ろいやすい社会的機能を探る書」ということになり、post-philological approach

という方法論上のキータームが使用されている。

本書は全6章から成る。第1章ではセビーリャの聖イシドルスの『語源誌』と『ゴート史』を題材に、イシドルスの著作がかつてのローマ・ヒスパニアとの歴史的決別を回復するために、いかに意図されたものであったかが探られる。第2章では『イスパニア年代記』や『七部法典』などの分析を通じて、アルフォンソ10世賢王統治下における俗語表記の意義が考察され、レコンキスタと再入植、そして公的表記言語としてのカスティーリャ語受容の相関関係が検証される。第3章ではネブリハの有名な「言語は帝国の伴侶」が取り上げられ、ネブリハのラテン語・俗語を含めた様々な著作のコンテクストを通じてこの言説の意義が検討される。第4章以降は舞台が新大陸に移され、マルティル・ダンギエラ、ベルナルディーノ・サアグン、ヌニョ・ベルトラン・デ・グスマンの手によるテキストを題材に征服期の人文主義的レトリックについて論じられている。新旧大陸の遭遇は文字文化 vs 非-文字文化 (=非-アルファベット文化) の対峙と捉えたうえで、宣教師の先住民諸語の文法編纂事業はキリスト教化=文明化に伴うメトニミーと解釈され(第5章)、最終章では帝国の言語としての俗語カスティーリャ語による「書きことば」の役割が総括される。

本書全般を貫くテーマは、言語(俗語)を公的な形で表記化することと帝国権力との相関関係を明らかにすることである。「書くことが意識の構造を変える」と述べたW.J.オング(『声の文化と文字の文化』桜井直文ほか訳、1991)をはじめとする表記言語の重要性を扱った論考はもちろんのこと、近年盛んに論じられるようになった帝国論に関する各種著作とつき合わせて読んでみると、本書の意義はさらに増すことだろう。

(おかもと・しんしょう 京都外国語短期大学)

【書評3】

野谷文昭編『メキシコの美の巨星たち』、東京堂出版、2011年

野谷 文昭

本書はメキシコの芸術をテーマとする、8人の研究者による論集で、国際交流基金の講座がベースになっている。日本ではリベラらの壁画が早くから紹介されてきたのに対し、はるかに遅れてではあるが、フリーダ・カーロやレオノーラ・キャリントン、レメディオス・バロら女性画家の作品も個展やグループ展を通じて知られるようになった。さらに東京現代美術館で開催されたルイス・バラガンの個展によって、彼の建築が広く知られるようになったことは記憶に新しい。一方、写真の紹介は遅れ、アルバレス・ブラーボのような世界的カメラマンでさえ部分的に紹介されるに留まっていた。映画については編者が興味を抱き続けてきたブニュエルを扱うことが最初の段階から決っていた。

講座を企画した理由でもあるが、本書の編纂を思い立ったのは、優れた芸術家を個々に紹介するだけでなく、ジャンルを超えて横断的に扱うことで、これまで見えてこなかった個性や共通点を浮かび上がらせることにあった。そして論集にまとめる過程ではっきりと見えてきたのが、本書で取り上げた人々が、モダニズムの洗礼を受けることで、ヨーロッパと土着の問題をそれぞれ独自に掘り下げていることである。ブニュエル、キャリントン、バロのようなヨーロッパからの亡命者はメキシコに到着する以前にモダニズムと接し、その上でメキシコの風土と取り組んでいる。アルバレス・ブラーボやバラガンのようなメキシコ生まれの人々はモダニズムに触れ、そこからあらためて土着文化を対象とする姿勢を見せる。カーロの場合もこれと似ている。

もっとも8人の論者がこのような観点を共有していたわけではない。パラガン・ブーム以前にすでに写真集を出していた齋藤裕氏、写真という広い文脈の中でアルバレス・ブラーボやティナ・モドッティを発見していた港千尋氏、かつてカーロを個人的体験と結びつけ、雑誌の連載で論じていた堀尾真紀子氏、ブニェルを含めメキシコの映画を継続的に研究してきた金谷重朗氏、ラテンアメリカ映画をジェンダー論的に読み解く作業を行ってきたマウロ・ネーヴェス氏、壁画を中心にメキシコ絵画を研究し、さらにチカーノやキューバの絵画にも目配りしている加藤薫氏、キャリントン、パロを紹介しつつ研究の対象としてきた野中雅代氏と、それぞれの研究スタイルは異なる。だからこそ編者がそれらを結び付けたいという欲望に駆られたことも確かだ。率直に言えば、本書は自分が読みたかった本なのである。

全員が集まることなしに始めた講座であり、本書の執筆も個人個人の自由に任せた感があるが、結果的にアーティストの人生や時代的背景に触れるなど、基本的なデータを押さえているあたりは大人の仕事という印象を受ける。編者はさておき、各分野を代表する研究者ならではの手並みを見せることで、編者の期待に応えてくれたことを大いに喜んでいる。残念だったのは長谷川ニナ氏のボサダ論が氏の都合で欠けたことだ。ある意味で要となる章であっただけに惜しまれるが、いずれ別の形で日の目を見ることを期待したい。

本書を編纂して感じたことは、こういう形でのコラボレーションには大きな可能性があるということだ。たとえば美術なら、タマヨやマリア・イスキエルドを含めて語ることができるだろうし、序章でわずかに触れただけのオゴルマンの建築やフィゲロアのカメラワークについて、大きな観点から語ることもできるだろう。今回は文学を含めなかったが、作家の中には大量の写真を残したルルフォがいるし、メキシコ文化について幅広く論じているオクタビオ・パス、フエンテスもいる。彼らを対象にすれば、文学との繋がりが生まれるはずだ。とくにパスはまさにモダニズムと接触する中で独自のスタイルを作ってきた。また、本書のように共時的に見る視点に対し、通時性を生かす方法もあるだろう。そうすることで、現在が見えてくる。編者が読みたい本は数多くある。因みに、本書刊行に合わせるかのように、加藤氏の著書『ディエゴ・リベラの生涯と壁画』（岩波書店）、コレット・アルバレス・ウルバフテル、他（杉山悦子訳）『マヌエル・アルバレス・ブラボ メキシコの幻想と光』（岩波書店）が相次いで出たことを付記しておきたい。（のや・ふみあき 東京大学）

【書評4】

アメリコ・カストロ『葛藤の時代について』、本田誠二訳、法政大学出版局、2009年

本田 誠二

『葛藤の時代について』（Américo Castro, *De la Edad conflictiva*, 3.^a edición; 初版 1961、第二版 1963、第三版 1972、第四版 1976、法政大学出版局、本田誠二訳、2009）は、訳者が長年たずさわってきたカストロ研究の大きな転換点（つまりセルバンテス学からスペイン史学への）を画す重要な作品で、純粋な文学評論というよりは、スペインの社会思想および歴史学の根本的見直しを迫る書ということができる。もちろんカストロ史学の転換点は一九四八年に出版された『歴史の中のスペイン—キリスト教徒・モーロ人・ユダヤ人—』であり、それを大幅に改訂した『スペインの歴史的現実』（一九五四）であることは言を俟たない。カストロ史学の主著ともいえるべきこれらの作品の翻訳は今後の課題として「十七世紀におけるスペイン文化の危機」と題された副題からも見てとれるように、本書はカストロ独自の歴史学

的知見に基づく全く新しい〈スペイン文化論〉としての価値をもっている。ちなみに本書の第二版（一九六三）に基づくフランス語訳（一九六五、パリ）の題名は『十六世紀スペイン人の生と文学における名誉のドラマ』となっているが、それによっても本書の内容が象徴的に示されている。つまり十六世紀、十七世紀という、いわゆるスペイン〈黄金世紀〉は、カストロにとって、名誉・体面という旧キリスト教徒の血統的な価値観が支配した危機の時代であって、彼はそれを〈葛藤の時代〉と呼んでいる。つまり一言でいえば、この書は既成の概念である〈黄金世紀〉を根本的に洗いなおすという意味を担っているのである。

カストロによるとスペイン史を論理的発想（razonamiento）ならざる憎悪的発想（odiamiento）で捉えるかぎり、真のスペインの姿が見えてこないばかりか、スペイン人自身も己の姿を知ることができない。こうした発想はどこに源があるかといえ、キリスト教徒が他の血統（モーロ人、ユダヤ人）に対する勝利と栄光、およびその延長である新大陸の発見と征服によって、自らを神の選民（純粋な血統）とみなすユダヤ的発想やおごり（神話性）をつよく抱くようになった点にある。血統的な穢れに対する恐れと同時に、どうしても〈血の純潔〉をもたねば体面を保って生きていけぬという強迫観念に支配された当時のスペイン人は、ロペ・デ・ベーガに代表される多数派農民の世論を代弁する演劇に、そのイデオロギーのただしさを見てとり、豊かな中産階級である新キリスト教徒（コンベルソ）に対する日ごろの社会的不満を解消させた。一方汚れたユダヤ的血統を有するコンベルソは、こうした社会で「何世代にもわたって永遠に晴らされることのない汚名」（ルイス・デ・レオン）を着せられた。フライ・ルイス・デ・レオンやマテオ・アレマン、サンタ・テレサやセルバンテス、グラシアンといった〈黄金世紀〉の偉大な作家・詩人・神秘家などが、コンベルソとして、こうしたイデオロギーに支配された社会に抗して、人間個人としての価値を規範として生きた、そのあり様を描いたものが本書である。

序文や前書きにもあるように、こうしたカストロの見方は、スペイン人たるものは歴史的に一枚岩で連綿として半島に暮らしてきたとする神話を信じつづけようとする、憎悪的発想に凝り固まった人々からは疎んじられてきた。しかし真のスペイン史が三つの異なる血統に属す同じスペイン人たちから成り立ってきたという論理的思考を受け入れるならば、葛藤の時代こそ最も実りゆたかな時代であったという逆説が成り立つのである。

スペイン本国で本書は名著でありながら、図らずも《神話破壊》の書と目されて、無視されてきたこともあって、日本ではなおのことその意義について知るところはすくない。したがってあらゆるものの価値を根本的に問い直す必要のある現代において、本書の意義は決して小さくはないものと確信する。なぜならば日本人はスペインをいまなお既成のイメージだけで捉えているからである。また本書が主著に次ぐほどの重要性をもっているにも拘らず、今日までフランス語訳（一九六五）しか世に出ていないという事実は、内容の濃さと相俟ってテキスト自体の難解さゆえと考えられる。

（ほんだ・せいじ 神田外語大学）

【自著紹介1】

『『スペイン文化事典』を編集して』

坂東 省次

今からもう40年ほど前のこと、当時、丸善の京都支店は京都市内のまっ只中の四条烏丸にあった。京都の大学で外国語を学んでいた筆者は、月に一回程度、丸善を訪れ、洋書を手

に外国留学の夢を膨らませていた。まだ、スペイン語の本が数少ない当時、講談社新書の『スペイン語のすすめ』（1965年）を購入して、丸善の近くの公園のベンチに座って、読書に耽っていたことを思い出す。

それから30年ほど経過した1991年のこと、丸善が「丸善ライブラリー」を出し始めた。まだ、新書戦争が始まる前のことである。当時の編集長石寺さんとの出会いから、「文化と歴史で学ぶ外国語（スペイン語、フランス語、中国語、ポルトガル語、イタリア語）」の企画が生まれ、316番で『文化と歴史で学ぶスペイン語』を上梓することができた。2000年のことである。

それから5年後の2005年には『南スペイン・アンダルシアの風景』、翌2006年には『スペインと日本人』の編集に携わった。

2008年秋のこと、丸善から『スペイン文化事典』が出ることになった。本や雑誌の編集の経験があったが、事典の編集は未経験であった。出したい、しかし本当に出せるのか、迷い、悩んだ。名著『スペインとポルトガルを知る事典』とどのように差異を付けるのか、これもまた大きな悩みの種でもあった。

『スペイン文化事典』の刊行を2日後に控えた2011年1月28日夜、セルバンテス文化センター東京で、『スペイン文化事典』のプレゼンテーションが開催され、集まった150名ほどのスペインファンに対して各分野の代表からスペインの魅力がさまざまな形で紹介された。

上梓された川成洋・坂東省次（編）、セルバンテス文化センター（協力）『スペイン文化事典』はA5版、884頁。

本書の章立ては「1. スペインという国」「2. 文化・文化現象・ファッション」「3. 美術・芸術」「4. 建築・彫刻」「5. 音楽・映画」「6. フラメンコと闘牛」「7. 食文化」「8. スポーツ・教育」「9. 文学・メディア」「10. 知識人・知的活動」「11. 言語・国民アイデンティティ」「12. 社会・政治・経済・宗教」「13. スペインの歴史」「14. 世界遺産・遺跡」の14分野で構成されている。これら14分野はさらに合計363の項目に細分化されており、それぞれの項目は基本的に見開き2頁で、小見出しが付けられ、関連写真が基本的に一葉掲載され、読みやすいレイアウト構成になっており、イスパノフィロ（スペイン大好き人間）のみならず、初学者から異文化コミュニケーション研究者まで、幅広い読者のニーズに応えられる内容になっている。

本書の最大の特色はなんといっても、伝統のスペインと新しいスペインの両面を十分に勘案し、総合的かつ立体的にスペイン文化の知識や情報を提供していることである。そのため本書では、スペイン文化のさまざまなテーマを「中項目主義」のスタイルで解説する方針を貫いている。小項目主義では情報がもの足りなく不十分であり、また大項目主義では情報過多で内容も専門的、あるいは論文調になり読んで退屈してしまうだろう。中項目主義では情報量が適度であり、読んで楽しく内容が理解できると考えたからである。

本書はカラーの口絵、本文、および巻末付録（歴史年表・地図・世界遺産一覧・パドロー一覧・読書ガイド）で構成され、総勢150名の内外の研究者が執筆に参加している。日本イスパニヤ学会の会員の方々にも多数ご寄稿いただいた、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

編集の過程で校正グラを何度となく読んだが、800頁を超す事典である、ミスプリや勘違いなどエラーが出てくる可能性がある。幸い売れ行き好調のようである、エラーは重版で訂正されてさらに充実した事典で再登場することだろう。

（ばんどう・しょうじ 京都外国語大学）

【新刊案内】

【2010年10月～12月】

- 高垣敏博『「食」のスペイン語』、東洋書店、2010年10月。
- 渡辺万里『スペインの竈から—美味しく読むスペイン料理の歴史』、現代書館、2010年10月。
- E・H・カー『コミンテルンとスペイン内戦』、富田武訳、岩波モダンクラシックス、2010年10月。
- 太田静六『スペイン・ポルトガルの古城』（新装版）、吉川弘文館、2010年10月。
- ガブリエル・ガルシア＝マルケス『誘惑の知らせ』、且敬介訳、ちくま文庫、2010年11月。
- ミゲル・デリーベス『糸杉の影は長い』、岩根圀和訳、彩流社、2010年11月。
- 福嶋教隆『スペイン語圏4億万人と話せる くらべて学ぶスペイン語 DVD+CD 付改訂版—入門者から「再」入門者まで—』（改訂版）、朝日出版社、2010年11月。
- 坂東省二・川成洋編『スペイン交流史』、れんが書房新社、2010年12月。
- 清水憲男『ドン・キホーテの世紀』、岩波書店（岩波人文書セレクション）、2010年12月。
- ジャン・ルイ・シェフェール『エル・グレコのまどろみ』、與謝野文子訳、現代思潮新社（エートル叢書）、2010年12月。
- ミゲル・デリーベス『糸杉の影は長い』、岩根圀和訳、彩流社、2010年12月。
- 小野塚千穂『スペインの家庭料理 いちばんおいしい87』、日東書院本社、2010年12月。
- 田中祐二、小池洋一編『地域経済はよみがえるか—ラテン・アメリカの産業クラスターに学ぶ』、2010年12月。
- マリオ・バルガス＝リョサ『世界終末戦争』、且敬介訳、新潮社、2010年12月。
- マリオ・バルガス＝リョサ『チボの狂宴』、八重樫克彦、八重樫由貴子訳、作品社、2010年12月。
- マリオ・バルガス＝リョサ『都市と犬ども』、杉山晃訳、新潮社、2010年12月。

【2011年1月～5月】

- メルバ・ファルク レジェス、エクトル・パラシオス『グアダラハラを征服した日本人』、服部綾乃、石川隆介訳、現代企画室、2011年1月。
- 川成洋、坂東省二編『スペイン文化事典』、丸善、2011年1月。
- 川口剛、竹中教明『ワンテマ指さし会話 スペイン×バル（とっておきの出会い方シリーズ）』、情報センター出版局、2011年1月。
- オクタビオ・パス『弓と豎琴』、牛島信明訳、岩波文庫、2011年1月。
- アントニー・ビーヴァー『スペイン内戦 1936-1939』（上・下）、根岸隆夫訳、みすず書房、2011年2月。
- 木村榮一『ラテンアメリカ十大小説』、岩波新書、2011年2月。
- 『コロンブス 航海の報告』、林屋永吉訳、岩波文庫、2011年2月。
- 池田健二『スペイン・ロマネスクへの旅』、中公新書、2011年3月。
- 坂東 省次、桑原真夫、浅香武和編『スペインのガリシアを知るための50章』、明石書店、2011年3月。
- 上田博人『スペイン語文法ハンドブック』、研究社、2011年3月。
- 『スペイン学』、13号、行路社、2011年3月。
- 『マゼラン 最初の世界一周航海／ピガフェッタ「最初の世界周航」／トランシルヴァーノ「モロッカ諸島遠征調書」』、岩波文庫、2011年3月。

- 益野碧『スペイン・ライフ 世界で一番すてきな国』、文芸社、2011年4月。
- ガブリエル・ガルシア=マルケス『族長の秋』、鼓直訳、集英社（改訂新版）、2011年4月。
- 野谷文昭編『メキシコの美の巨星たち』、東京堂出版、2011年4月。
- フランシスコ・アヤラ『仔羊の頭』、松本健二・丸田千花子訳、現代企画室、2011年4月。
- セルヒオ・ピトル『愛のパレード』、大西亮訳、現代企画室、2011年4月。
- 西島章次、小池洋一『現代ラテンアメリカ経済論』、ミネルヴァ書房、2011年4月。
- エドムンド デスノエス『低開発の記憶』、野谷文昭訳、白水社、2011年5月。
- ホルヘ・ルイス・ボルヘス『七つの夜』、野谷文昭訳、岩波文庫、2011年5月。
- コレット・アルバレス・ウルバフテルほか『マヌエル・アルバレス・ブラボ写真集 メキシコの幻想と光』、杉山 悦子訳、岩波書店、2011年5月。

国際学会案内

【2011年度】

6月

〈1, 2日〉

Primer Congreso Nacional de Hispanistas de Israel; Universidad Hebrea de Jerusalén, Jerusalén, Israel.

〈1～4日〉

XXXI Asamblea y Congreso Internacional de la Asociación de Doctores y Licenciados Españoles en los Estados Unidos (ALDEEU), 'El viaje a Ítaca'; Ithaca, Estados Unidos.

〈2～4日〉

IV Congreso sobre la enseñanza del español en Portugal; Évora, Portugal.

〈3, 4日〉

II Congreso Internacional sobre Ciudades, Culturas y Sociabilidades; Facultad de Letras de la Universidad de Oporto, Oporto, Portugal.

〈6～9日〉

XVI Congreso Internacional de la Asociación de Lingüística y Filología de América Latina (ALFAL); Universidad de Alcalá, Alcalá de Henares, Madrid, España.

〈7～10日〉

IV Encuentro de la Hispanidad: trans-acciones interculturales; Boa Vista, Roraima, Brasil.

〈11日〉

Hispanismo(s): Limites Incertos; SESC Consolação, São Paulo, Brasil.

〈14～17日〉

X Congreso de la ADHILAC: «Las revoluciones en la historia de América Latina y el Caribe en el siglo XX»; Santo Domingo, República Dominicana.

〈15～17日〉

Sexto Congreso Internacional de la Cátedra UNESCO para el mejoramiento de la calidad y equidad de la Educación en América Latina, con base en la lectura y escritura; Universidad del Norte, Barranquilla, Colombia.

〈16, 17 日〉

XIV Jornadas Pedagógicas para Profesores de Español en Suecia; Instituto Cervantes de Estocolmo, Estocolmo, Suecia.

IX Encuentro Internacional del GERES: «Innovaciones didácticas en la enseñanza-aprendizaje del Español para Fines Específicos con recursos tecnológicos»; Grenoble, Francia.

〈17, 18 日〉

III Congreso Internacional sobre las Migraciones; Oporto, Portugal.

〈22~24 日〉

VI Jornadas de Historia y Cultura de América; Universidad de Montevideo, Montevideo, Uruguay.

〈23~25 日〉

International Society for Language Studies Conference. 'Critical Language Studies: Focusing on Identity'; Renaissance Aruba Resort & Casino, Oranjestad, Aruba.

〈24~26 日〉

I Congreso Internacional sobre Historia, Literatura y Arte en el Cine Español (1896-2011); Universidad Carlos III de Madrid, Madrid, España.

IV Jornadas de Formación de Profesores de Español como Lengua Extranjera en China. «Didáctica y materiales en el aula de ELE en China»; Centro de Recursos de la Consejería de Educación de la Embajada de España en China, Pekín, China.

〈27~29 日〉

XXI Seminario Internacional del SELITEN@T. «Erotismo y teatro en la primera década del siglo XXI»; Madrid, España.

Congreso Internacional. «Realismo y decadentismos en la literatura hispánica»; Universitas Castellae, Valladolid, España.

〈27 日~7 月 8 日〉

XII Seminario de Posgrado. Literatura argentina y latinoamericana: crítica y creación; Chaco, Argentina.

〈28~30 日〉

I Congreso Internacional sobre Historia, Literatura y Arte en el Cine en Español y en Portugués; Salamanca, España.

7 月

〈1~3 日〉

Congreso Internacional Turismo Cultural y Lingüístico; Caracas, Venezuela.

〈5~6 日〉

VI Coloquio Certificado de Español Lengua y Uso (CELU); Buenos Aires, Argentina.

〈6~9 日〉

AATSP 93rd Annual Conference, 'Spanish and Portuguese for a New Era: Advocacy, Policy and Programs'; Grand Hyatt Washington, Washington, Estados Unidos.

〈11~15 日〉

IX Congreso de la Asociación Internacional Siglo de Oro (AISO); Universidad de Poitiers, Poitiers, Francia.

〈13~15 日〉

I Congreso Internacional sobre «Los siete infantes de Lara: la historia frente a la leyenda»; Salas de los Infantes, Burgos, España.

〈第 3 週〉

VII Coloquio Internacional «José María Arguedas» de Antropología y Literatura, 'Centenario del nacimiento de José María Arguedas'; Lima, Perú.

〈19~23 日〉

XIV Congreso Brasileiro de Profesores de Español, II Seminario Nacional de COPESBRA (Comissão Permanente para Implantação do Espanhol no Sistema Educativo Brasileiro); Universidade Federal Fluminense (UFF), Campus de Gragoatá, Niterói, Río de Janeiro, Brasil.

8 月

〈3~5 日〉

XVII Congreso de la Asociación de Colombianistas, 'Narrar Colombia: Colombia narrada'; Universidad Industrial de Santander, Bucaramanga, Colombia.

〈24~26 日〉

X Jornadas Internacionales de Literatura Española Medieval, 'Homenaje al quinto centenario del Cancionero General de Hernando del Castillo'; Pontificia Universidad Católica Argentina 'Santa María de los Buenos Aires', Buenos Aires, Argentina.

IV Coloquio Nacional de Historia de la Literatura Colombiana. Prensa y Literatura; Universidad de Antioquía, Medellín, Colombia.

9 月

〈1, 2 日〉

Simposio del Grupo de Estudios sobre la Crítica Literaria: «Teóricos y críticos frente al espejo»; Universidad de Cuyo, Mendoza, Argentina.

〈1~3 日〉

32nd Conference. Association for Contemporary Iberian Studies; University of Glasgow, Glasgow, Reino Unido.

〈6~10 日〉

XIV Congreso de la Asociación Hispánica de Literatura Medieval (AHLM); Facultad de Letras (La Merced), Universidad de Murcia, Murcia, España.

〈8~10 日〉

Xenografías II: la representación de los extranjeros en la literatura, los libros de viajes y otros discursos; Universitat Pompeu Fabra, Barcelona, España.

〈9~10 日〉

Primer Congreso de Traducción e Interpretación; Colegio de Traductores Públicos del Uruguay (CTPU), Montevideo, Uruguay.

〈12~14 日〉

II Congreso Internacional de la Red de Investigación sobre América Latina. Etnicidad, Ciudadanía y Pertenencia. Interdependencias de categorizaciones sociales; Colonia, Alemania.

〈12~14 日〉

VIII Encuentro Internacional de Historiografía: No sólo en grafías se inscribe la historia. Discursos historiográficos fuera del texto: monumentos, ceremonias, paisajes u otros objetos como representaciones del pasado y el devenir; Universidad Autónoma Metropolitana Unidad Azcapotzalco, México.

〈13~16 日〉

III Encuentro de Jóvenes Investigadores de la Asociación de Historia Contemporánea (AHC); Vitoria / Gasteiz, España.

〈14~16 日〉

XII Simposio Internacional de Mudejarismo; Teruel, España.

〈19, 20 日〉

Los géneros poéticos del Siglo de Oro. Centros y periferia: «Homenaje a Anthony Close»; Clare College, Cambridge, Reino Unido.

〈21~23 日〉

Historia del Pensamiento Español sobre «La primera Escuela de Salamanca (1406-1516)»; Salamanca, España.

〈25~28 日〉

I Congreso Regional Europeo de la Asociación Internacional de Semiótica Visual. «Semiótica del Espacio / Espacios de la Semiótica»; Lisboa, Portugal.

〈29, 30 日〉

Reunión Científica Internacional sobre Humanismo. «La imagen del mundo en la tradición humanística: autores, textos, imágenes»; Universidad de Salamanca, Salamanca, España.

10 月

〈5~8 日〉

XV Congreso de la Asociación de Teatro Español y Novohispano de los Siglos de Oro (AITENSO). 'El teatro barroco revisitado: textos, lecturas y otras mutaciones'; Universidad Laval, Quebec, Canadá.

〈12~14 日〉

VII Simposio Internacional: La enseñanza del arte, el español, la historia y la literatura a extranjeros. Evaluación y nuevas tecnologías; Centro de Enseñanza para Extranjeros de la UNAM, México D.F., México.

〈13~15 日〉

Historia de la traducción en Hispanoamérica: mediación lingüística y contactos culturales; Universitat Pompeu Fabra, Barcelona, España.

〈17~18 日〉

Coloquio Internacional. «Luis Landero»; Neuchâtel, Suiza.

〈17~21 日〉

XXIX Encuentro Nacional de Docentes e Investigadores de la Lingüística (ENDIL); Guatamare/ Isla de Margarita/ Estado Nueva Esparta, Venezuela.

〈18, 19 日〉

Congreso Internacional Rafael Altamira; Universidad Complutense, Madrid, España.

〈18~20 日〉

Congreso Internacional de Crítica Artística Latinoamericana. Del indigenismo a la interculturalidad: balance del debate identitario en la crítica de arte latinoamericana; Universidad Carlos III de Madrid, Madrid, España.

〈19~22 日〉

VII Congreso Internacional de la Asociación Latinoamericana de Lingüística Sistémico-Funcional. Del género a la cláusula: los aportes de la LSF al estudio del lenguaje en sociedad; Facultad de Humanidades y Ciencias de la Universidad Nacional del Litoral, Argentina.

〈20, 21 日〉

Una profunda necesidad en la ficción contemporánea: la recepción de Borges en la república mundial de las letras; Radboud University Nijmegen, Nijmegen, Países Bajos.

〈25~28 日〉

Congreso Internacional Valle-Inclán y las Artes; Santiago de Compostela, España.

〈26~28 日〉

Representaciones de la violencia política en la literatura latinoamericana contemporánea. Con especial atención a las literaturas de Argentina, Chile y Perú; Universidad Alberto Hurtado, Santiago, Chile.

V Coloquio Nacional de Historia de la Literatura Colombiana. Mujeres y literatura: aportes y perspectivas en el ámbito internacional; Universidad de Antioquia, Medellín, Colombia.

〈31~11 月 2 日〉

I Coloquio Internacional "Tradición del día de muertos en México. Representación en zonas de frontera"; Instituto de Arquitectura Diseño y Arte, Ciudad Juárez, México.

11 月

〈6~13 日〉

V Colóquio Interdisciplinar sobre Provérbios (ICP11); Tavira, Portugal.

〈7～9 日〉

IV Congreso Internacional CELEHIS de Literatura; Universidad del Mar del Plata, Mar del Plata, Argentina.

〈14～17 日〉

V Congreso Internacional Historia de la Transición en España. «Las organizaciones políticas»; Almería, España.

〈21～23 日〉

VII Conferencia Internacional Lingüística 2011. En homenaje al Dr. José Antonio Portuondo Valor; Instituto de Literatura y Lingüística 'José Antonio Portuondo Valdor', La Habana, Cuba.

III Congreso Internacional Mitos Prehispánicos en la literatura latinoamericana. Homenaje a José María Arguedas en su centenario; Universidad de Alicante, Alicante, España.

〈24～25 日〉

III Simposio Internacional. «La percepción del tiempo en lengua y literatura»; Universidad de Ljubljana, Ljubljana, Eslovenia.

12 月

〈11～3 日〉

VII Coloquio Internacional «Azorín y los clásicos redivivos y los universales renovados»; Université de Pau et des Pays de l'Adour, Francia.

II Coloquio internacional. «Marcadores discursivos en las lenguas románicas-un enfoque contrastivo»; Buenos Aires, Argentina.

(<http://hispanismo.cervantes.es/agendas.asp> 参照)

編集後記

皆様のご協力のおかげでようやく「会報」18 号が刊行の運びとなりました。寄稿していただいた先生には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。

編集に際して当初どのようなかたちにすべきか迷いましたが、まずは前号を踏襲するかたちで始めることにし、そこに今回は静岡県立大学の森直香氏の協力を得て「国際学会案内」を加えることにしました。

「会報」の構成については、今後会員の皆様のアイデアを拝借するなりして、少しでも改善できればと考えております。

(広報担当理事：佐竹謙一)